



Title	和牛子牛の価格形成と血統問題
Author(s)	柳, 京熙; 飯澤, 理一郎
Citation	北海道農業経済研究, 7(2), 72-82
Issue Date	1998-09-30
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/63173
Type	article
File Information	KJ00009065009.pdf



[Instructions for use](#)

[論 文]

和牛子牛の価格形成と血統問題

柳 京 熙*・飯澤理一郎**

I. はじめに

「日米牛肉」合意に沿って、日本が牛肉の輸入自由化に踏み切ったのは、1991年のことであった。交渉開始以来、日本の牛肉生産、とくに輸入牛肉と競合する乳用牝牛を素牛とした牛肉生産は大きな打撃を受けてきた。牛肉自給率は1991年の63%から1996年には47%へ急落し、また、乳用牝牛ぬれ子価格は暴落してきた。こうした中で、国内牛肉生産の柱として期待され、注目を集めてきたのは和牛である¹⁾。和牛の持つ独特の食味等が、輸入牛肉と十分に競争しえると考えられたからである。以来、国内の牛肉生産は和牛へと大きく傾斜していくこととなる。

ところで、和牛肉生産の増大には、和牛子牛生産の増大が先行しなければならない。しかし近年、域内自給化が強調され、とりわけ子牛産地における地域内一貫化が強まっている。これは結局、子牛産地における繁殖雌牛の頭数減少と相まって子牛移出の度合いを低下させてきている。こうした中で、この間、和牛生産を急速に拡大し、都府県に対する子牛移出産地として台頭してきたのが北海道である。その移出子牛頭数は1991年から1996年の間に、9千146頭から1万5千773頭へと増大している。

今後の日本における和牛生産の拡大は、北海道での子牛生産が大きな影響を与えると思われる。しかし、北海道では急激に生産を拡大してきたこともあって、優良「血統」の精液が十分に確保できないなど、そこには様々な問題が含まれているのも事実である。とくに、和牛も含む牛肉価格の全般的低迷の中で、和牛子牛価格が低迷してきていることは大きな問題で、生産構造が不安定化し、縮小再生産へ向かう傾向すら見受けられるのである。

本稿では、以上のような問題関心の下、まず「血統」と子牛価格形成水準との連関を全国的視野から検討し、次いで北海道における和牛子牛価格形成の諸問題を、「血統」、子牛市場の「寡占化」と関連づけながら検討していくことにしたい。

II. 「血統」問題と和牛子牛の価格形成

1. 肉質重視の生産への傾斜と「血統」問題の浮上

和牛価格、子牛価格形成の基礎に血統問題があることは周知のことであろう。

日本における和牛改良、血統整備は改良組織の形成・確立に伴って発展してきた。和牛生産がようやく本格化しつつあった1960年代初頭、和牛改良は肉質よりも肉量を重視した方向で進められ、

*北海道大学大学院農学研究科、**北海道大学農学部

審査基準も「体積・体型」を重視したものであった。役用牛から肉用牛に転換して間もなくの頃で、まだ和牛は役用牛としての特質を残しており、まず、それなりの肉量を確保できる和牛を作るのが第一だったからである。

しかし、「飽食化」が叫ばれ始めた1970年代中葉以降、次第に肉質が重視されるようになり、和牛改良の方向も「体積」重視から「肉質」重視へ大きく方向転換する。そして、ここで浮上してきたのが特定種雄牛の名をかぶせた「血統」問題であり、肉質の優れた「兵庫系統」が一躍脚光を浴び、子牛価格はますます「血統」を第一の基準として形成されるようになってくるのである。

図1は主要産地の子牛価格の推移を示したものである。とくに、牛肉輸入自由化前後以降、肉質の優れた兵庫の子牛価格が顕著に上昇し、各産地間の価格差は大きく拡大してきている。こうした価格差の形成・拡大が各産地に大きなインパクトを与え、肉質重視、「血統」重視の子牛生産はますます加速化していく。しかし、優良「血統」種雄牛を持つ先進産地ならいざ知らず、新興産地が優れた資質・「血統」の種雄牛を入手するのは容易なことではない。優れた資質を持つ種雄牛、さ

らに一つの「血統」として認められるほどの種雄牛を独自で一朝一夕に作り出すのは至難の業だからである。「血統」による大きな価格差の存在と種雄牛生産・確保の困難性は、新興産地を優良「血統」精液の購入・確保に走らせることになる。中には、種雄牛の改良や繁殖雌牛の改良にほとんど手を染めずに、もっぱら優良精液の確保にのみ走る新興産地すら出現してきたのである。しかし、優良精液を確保したからといって、必ずしも「高」子牛価格を実現できるとは限らない。繁殖雌牛の改良はもちろん、農家段階での生産技術の向上など、優良精液＝「高」子牛価格となるためにはクリアしなければならない課題が山積しているからである。

2. 「血統」と子牛価格形成水準の関連

1970年代初頭、それほど価格格差のなかった子牛価格は、以降、肉質重視の傾向が強まる中で、兵庫を代表とする肉質型子牛（但馬牛など）に需要が集中し、格差は次第に拡大してきた²⁾。開差は、とくに牛肉輸入自由化前後、ピークに達し、例えば兵庫と新興産地北海道の価格差は20万円ほども達した。最近、若干縮小してきたとはいえ、

未だ大きな開差の存在することは前掲図1に見られる通りである。

表1は1996年の子牛家畜市場の販売成績を示したものである。取引価格が最も高いのは兵庫湯村で、以下岐阜高山、岐阜関、宮崎宮崎、大分玖珠の順となっている。中でも兵庫湯村、岐阜高山は50万円を超し、岐阜関以下を大きく引き離し、1位と10位とでは10万円以

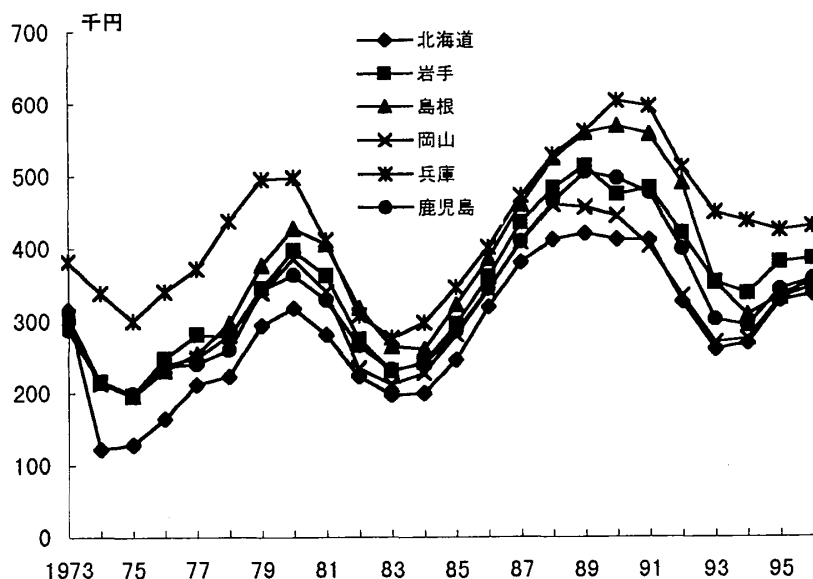


図1 主要産地における子牛の価格推移

資料：『北海道における肉用子牛の指定家畜市場取引成績』より作成した。

表1 家畜市場における子牛の取引価格（1996年度）

(単位：千円)

前年順位	順位	市場名	取引価格
1	1	兵庫県湯村	532
2	2	岐阜高山	518
3	3	岐阜関	459
6 →	4	宮崎宮崎	445
7 →	5	大分玖珠	438
4 ↘	6	岩手県南（胆江）	431
9 →	7	宮崎東諸	422
8	8	兵庫淡路	421
12 →	9	宮崎児湯	415
11 →	10	宮崎南那珂	411
14 →	11	大分大分	410
	50	北海道白老	351
	54	北海道十勝	348
	65	北海道美幌	330
		市場平均価格	376

資料：農畜産振興事業団「肉用牛取引情報」

注）岩手の場合、1997年から胆江と磐井市場が県南市場に統合されたが、ここでは取引成績を別々にまとめた。

上の差が生じている。こうした価格差が、主として「血統」に基づいていることは今更いうまでもなからう。兵庫は今日、種雄牛、精液の移出産地として極めて高い地位を保持しているのである。同表にランクされる岐阜、岩手、宮崎は、いち早く兵庫から種雄牛を導入し改良を進めてきた産地であり、「但馬牛」生産によって価格優位を勝ち得た産地である。中でも、岐阜は「安福」、岩手は「菊谷」の導入によってベストテン入りし、相対的な高価格を実現してきたのである。

ところで、これら産地は種雄牛の確保だけではなく、資質の優れた繁殖雌牛の独占的な確保にも努めてきた。こうして、資質の高い子牛の継続的生産システムを構築し、また逆に、繁殖雌牛に対して優良な種雄牛・精液を継続的に供給することを可能にしてきている。当然ながら、精液と優良繁殖雌牛の外部への移出は厳しく限定されている。こうした体制が敷かれれば敷かれるほど、当該産

地の子牛に対する需要が全国から集中し、価格形成が有利に展開していくことはいまでもない。表1で上位にランクされた兵庫、岐阜、宮崎、岩手は、こうした体制を築いた産地といってよい。しかし、こうした地域内での「自己完結性」の強い和牛改良体制を築くには多くの時間と多額の投資を必要とする。また、地域内の合意形成と農家・農協等の協調体制も必要不可欠であり、一朝一夕にできあがるものではない。しかし、前述の通り、新興産地の中には、事を急ぐあまり、闇雲に優良精液の確保のみに走るところも現れ、また優良精液を導入しても、それに相応しい価格水準がなかなか実現できない、いわゆる新興和牛産地における「血統」と形成価格水準の乖離という問題も発現してきているのである³⁾。

3. 「育種価評価法」の登場と後発産地

ところで、「血統」という不完全な情報より、一層正確な方法で和牛の評価法を確立しようとして登場してきたのが「育種価評価」⁴⁾である。それは、と殺後の枝肉成績を基礎に、血統情報、繁殖雌牛の情報などを組み合わせ、種雄牛、繁殖雌牛の遺伝的能力を推定しようというものである。

「育種価評価」が徐々に浸透してくる中で、登録協会は、育種価を改良に活用するために、1993年、「育種牛制度」に育種価を導入し、育種価を各育種組合の育種牛選定基準に盛り込むことを決定した⁵⁾。1997年7月時点で、35道府県41地域で育種価評価が実施され、供用中である繁殖雌牛内約3分1の育種価が後代の枝肉成績から判明している。しかし、図2のとおり、繁殖雌牛の育種価判明率は地域によって大きく異なっている。育種価を把握するためには、まず枝肉成績が必要になるが、繁殖産地の場合、その情報が容易に入り難いからである。子牛移出産地・北海道は、その典型といってよい。

さらに、精液問題も絡んでいる。血統を決定す

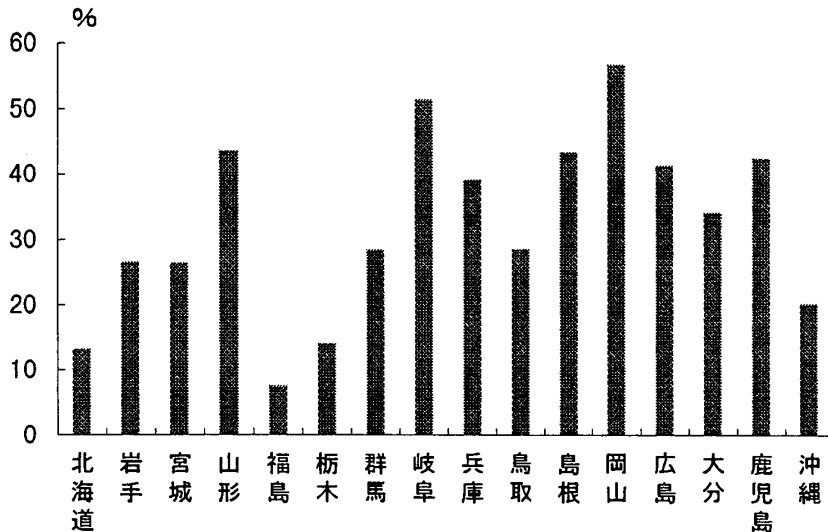


図2 繁殖雌牛の育種価判明率

資料：全国和牛登録協会「これからの和牛の育種と改良」p.82より作成した。

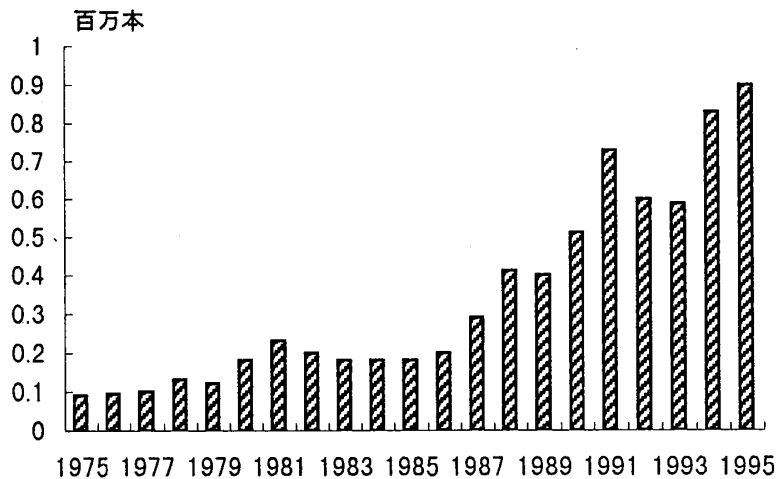


図3 家畜改良事業団による精液配布本数の推移

資料：家畜改良事業団の資料から作成した。

る際、最も重視されるのは精液であるが、それを自給しているのはたったの30組合ほどにしか過ぎない⁶⁾。ほとんどの組合は、精液供給を家畜改良事業団や民間会社からの供給に仰いでいるのである。

図3は、家畜改良事業団による精液の配布本数を示したものである。1995年度の配布本数は91万本にのぼり、全国の精液供給量の7割を占めると推測されている。配布本数は年々増加し、とくに1990年代に入り大幅な増加を見せている。し

かし、需要の高い優良精液の場合、精液生産能力が年間10数万本と限定されており、絶対的な供給不足状態にある。さらに、優良精液の一部は「平準化事業」との関連で別枠として供給されているから、不足状態は一層加速されているのである。こうした中で、偽「優良精液」が出回る可能性が高いことは容易に想像されよう。これが、精液の特定を困難にし、育種価評価を困難にしているのである。北海道を始めとした後産地の育種価判明率の低い要因が、そうしたところにもあるといえるのである。

確かに、「育種価評価」の導入は、これまでよりも一層短期間で和牛を計画的に改良することを可能にした。しかし、如上の諸問題は、とくに後産地の育種価評価を困難にし、和牛改良の大きな制約となっているのである。

Ⅲ. 北海道の和牛子牛の価格形成問題

1. 和牛改良と優良精液の確保

続いて、後産子牛移出産地北海道を事例に、後産産地における和牛改良と優良精液の確保の問題を検討しよう。

図4は、北海道の和牛生産の推移を示したものである。北海道の和牛生産は1990年代に入り大きく増加している。

北海道の和牛生産は、肥育産地形成の遅れもあっ

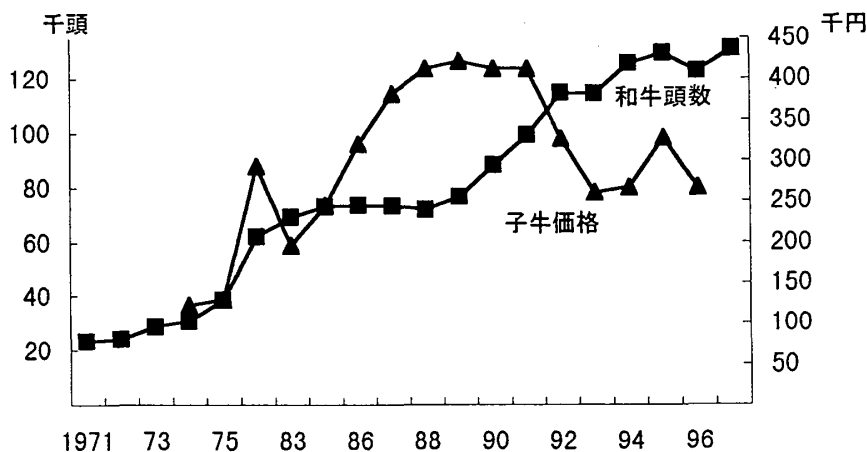


図4 北海道における和牛生産の推移
資料：「北海道農林水産統計年報」から作成した。

て、導入当初から子牛移出を中心としたものであった。また、和牛改良の基盤助成も遅れたため、和牛改良への関心も薄く、繁殖雌牛の導入は主に飼養管理の容易を示す「体型・体積」が重視された。確かに、北海道農業開発公社や個人などが、肉質系の種雄牛を導入した経緯もあったが、人工授精事業が酪農地帯に重点的に配置されていたこともあって、それらは主に「マキ牛」として利用され、種雄牛改良への本格的利用は極めて限られていた。

になってきている。しかし、優良種雄牛を保有する産地が精液の域外流出を厳しく限定している中で、その供給の大宗を家畜改良事業団に仰がざるをえない。事実、表2にみられるように、北国7の8を筆頭に、価格形成上、上位に位置する子牛のほとんどは家畜改良事業団からの精液によって生産されたものによって占められているのである。

しかし、問題は家畜改良事業団の優良精液が十分に供給されないことである。優良種雄牛を持た

「マキ牛」による自然交配牛は市場評価も低く、価格形成上不利にならざるをえない。前掲図1のように、子牛価格の形成水準は低く、北海道は都府県に対する安価な子牛供給基地として位置づけられているのである。

最近、飼養頭数が次第に増加する中で、和牛改良に対する関心が徐々に高まり、子牛価格形成に有利な優良精液の確保に取り組むよう

表2 種雄牛別市場成績 (1995年度)

単位：頭数、千円

去勢牛					雌牛				
父牛名	取引頭数	最高価格	最低価格	平均価格	父牛名	取引頭数	最高価格	最低価格	平均価格
安福165の9	13	735	412	584	賢深	15	491	167	320
北国7の8	1,443	705	186	413	第5平茂	316	615	132	315
北国7の3	16	498	327	388	北国7の8	698	516	151	313
紋次郎	581	685	199	383	北国7の3	7	341	284	311
9中丸	18	437	279	350	紋次郎	257	585	137	285
安福	9	482	304	401	菊照美	54	362	202	284
菊幸	6	380	344	361	安福栄	87	382	200	287
菊安	547	638	133	364	藤桜	7	358	219	293
金鶴	29	469	296	370	高栄	733	488	149	282
勢富士	10	451	278	340	金鶴	15	372	193	273
小計	2,672			395	小計	2,189			296
総出荷頭数	8,813			351	総出荷頭数	5,520			261

資料：北海道肉用家畜協会「黒毛和種子市場価格調査分析表」から作成した。

注) 種雄牛別価格形成はkg単価順である。

表3 種雄牛別子牛出荷の現状

県南市場（岩手）			高山市場（岐阜）			十勝市場（北海道）		
種雄牛別	頭数	割合	種雄牛別	頭数	割合	雄牛別	頭数	割合
菊谷	164	51.6	安福	152	31.9	北国7の8	141	19.2
照本	63	19.8	糸福	126	26.4	高栄	83	11.3
福神	45	14.2	安栄	68	14.3	安金	69	9.4
谷吉	17	5.3	安糸晴	44	9.2	菊安	58	7.9
恒徳	16	5.0	千町の1	14	2.9	谷茂	41	5.6
谷勤	7	2.2	飛驒福桜	13	2.7	紋次郎	35	4.8
夏茂	3	0.9	福竜王	13	2.7	北賢桜	16	2.2
その他	3	0.9	その他	47	9.9	その他	291	39.6
合計	318	100.0		477	100.0		734	100.0

資料：各市場の市場名簿から作成した。

注）県南市場は1997年4月8日の出荷、高山市場は1997年9月3～4日の出荷、十勝市場は1995年7月19日～20日の出荷である。

ない北海道での優良精液に対する需要はすこぶる高いが、種雄牛の生理的限界や地域間の配分問題のため、供給量は需要にはるかに及ばない。1996年に家畜改良事業団から北海道に供給された優良精液は、1～2万本、生産量の17%程度にしか過ぎず、絶対的供給不足状態にある。

しかも、その一部は「平準化事業」との関連で、別枠で供給されているから、不足は加重化しているのである。「平準化事業」は、候補種雄牛の産肉検定のため、生産農家の保有する繁殖雌牛との交配を行い、その成績を検定するというものである。農家の参加を促進するために、優良精液が参加農家に優先枠として供給されているのである⁹⁾。優先配分枠は参加繁殖雌牛の頭数で決められ、100頭当たり2%とされている。1995年で見ると、優良精液の内27%程度がそれによっているものであり、その持つ意味はすこぶる大きい。北海道は当初からこの事業に積極的に参加し、1995年時点で351頭と全国の26%を占め、北国7の8、美津福、金鶴の優良精液を入手している。北海道家畜改良事業団では、それらを他の精液と組み合わせて事業参加農家に配布している。しかし、残り74%分は優先的に事業参加都府県に配分されており、勢い北海道に一般的に供給される優良精液量はより制

限されざるをえない。家畜改良事業団からの精液だけでは、需要を満たし切れないのである。さらに安福165の9や紋次郎などはすでに精液の供給が打ち切れている状況であり、表2のように上位いくつかの精液を除けば、市場平均の価格よりそれほど高くないことが指摘できる。

表3は、北海道十勝市場と岩手県県南市場、岐阜県高山市場に上場された子牛の血統別頭数を示したものである。県南市場では菊谷の51.6%を先頭に上位3つで85.1%を、高山市場では安福の31.9%を先頭に72.6%を占めている。これに対して北海道ではトップの北国7の8でも19.2%に止まり、上位3つで39.9%、5つでも53.4%とようやく過半を超えるに過ぎない。100種類もの精液が使われているといわれるように、北海道では実に様々な精液が使われているのである。もちろん、それらの中には優良精液でないものが混じっていることは疑いなく、後発産地の優良精液確保の困難性を伺わせている。

2. 優良精液の不足・道外家畜商による市場「寡占化」と価格形成

最後に、優良精液と子牛価格の関連について検討しよう。

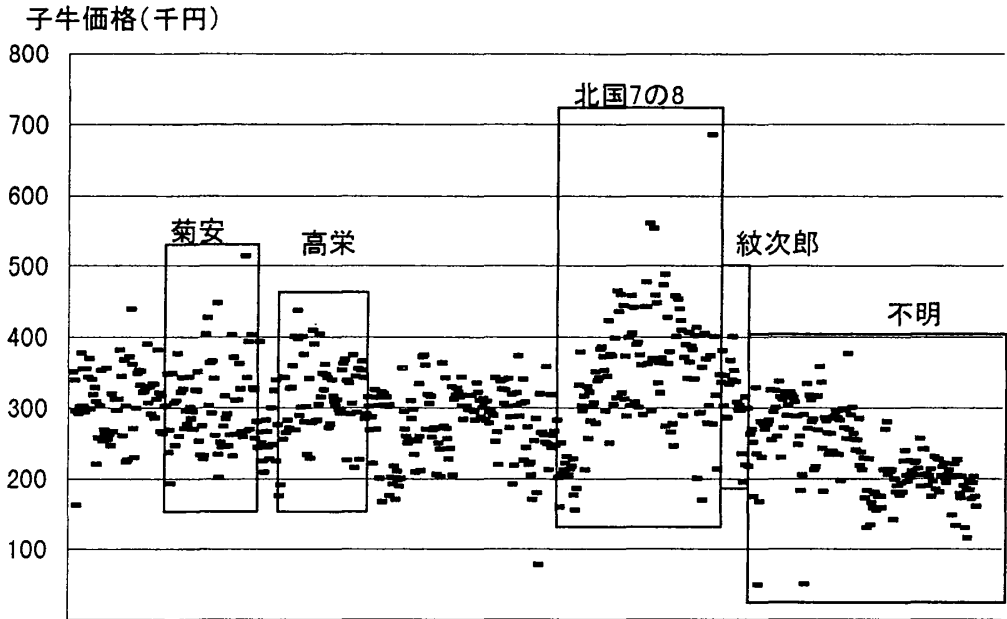


図5 去勢子牛の種雄牛別価格分布

種雄牛別産子の分布

資料：家畜市場名簿から作成した。

注1) 対象市場は十勝、美幌市場である。

期間は十勝市場は1995年7月19日～20日、美幌市場は同年6月19日である。

2) 対象頭数は去勢子牛の630頭の成績である。

3) 四角に囲んであるのは主要種雄牛の精液を利用して生産された子牛を現している。

四角の上の名前は主要種雄牛の名称である。

子牛価格(千円)

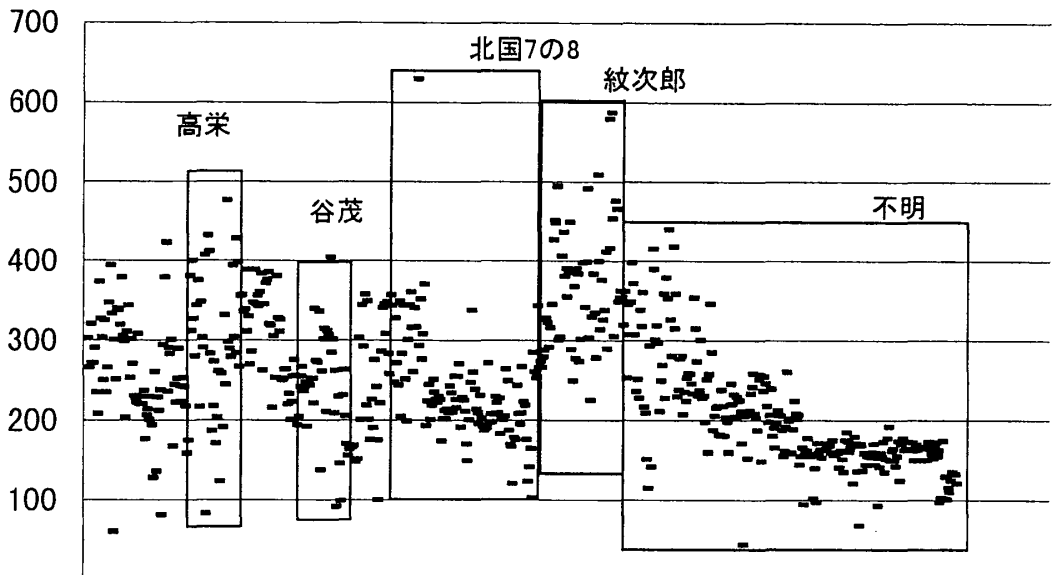


図6 雌子牛の種雄牛別価格分布

種雄牛別産子の分布

資料：家畜市場名簿から作成した。

注1) 対象市場は十勝、美幌市場である。

期間は十勝市場は1995年7月19日～20日、美幌市場は同年6月19日である。

2) 対象頭数は雌子牛の678頭の成績である。

3) 四角に囲んであるのは主要種雄牛の精液を利用して生産された子牛を現している。

四角の上の名前は主要種雄牛の名称である。

100% 取引頭数の割合

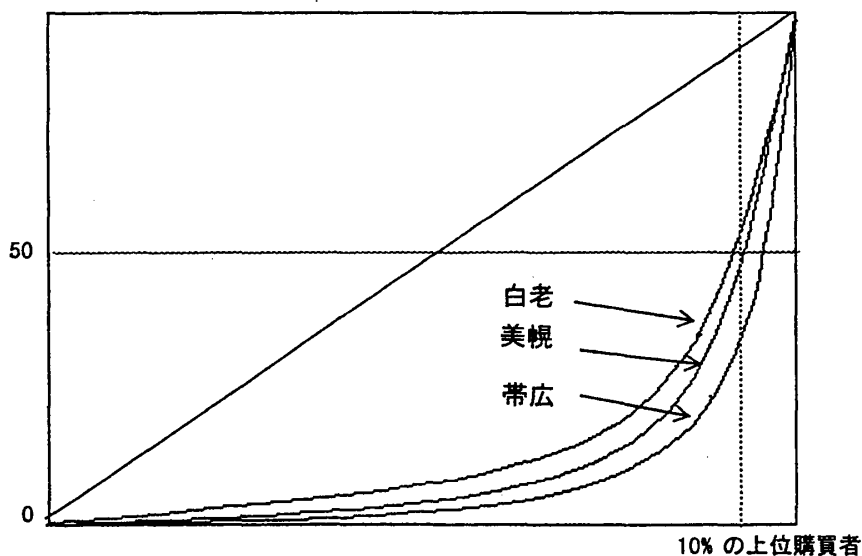


図7 北海道主要家畜市場における購買者の相対的集中度

資料：ホクレンの家畜市場関係資料から作成した。

注1) 対象市場は白老、十勝、美幌市場である。

注2) 購買者は年間10頭以上の取引成績を持つ者に限定した。

注3) 市場成績は1994年度である。

表4 地域市場における買参人の取引成績

(単位：頭、円)

買手	実数		割合	
	取引頭数	取引金額	取引頭数	取引金額
A	3,635	10.0	18.5	19.2
B	841	2.4	4.3	4.6
C	730	1.4	3.7	2.7
D	596	1.7	3.0	3.3
E	481	0.9	2.5	1.7
上位5者	6,283	16.4	32.0	31.5
F	432	0.7	2.2	1.3
G	546	1.5	2.8	2.9
H	541	0.9	2.8	1.7
I	388	1.1	2.0	2.1
J	380	1.1	1.9	2.1
上位10者	8,570	21.7	43.7	41.7
・	・	・	・	・
・	・	・	・	・
合計	19,616	52	100	100

資料：ホクレンの家畜市場関係資料から作成した。

注1) 対象市場は白老、平取、洞爺、十勝、美幌市場である。

注2) 購買者は年間10頭以上の取引成績を持つ者に限定した。

図5は去勢子牛の、図6は雌子牛の種雄牛別価格を示したものである。一見して、同一精液でも価格差がすこぶる大きいことが解ろう。去勢子牛の北国7の8を例にとれば、上は60万円弱から下は20万円弱まで、実に40万円もの開差がある。それは、去勢、北国7の8に限られたことではなく、全てに見られるのである。優良精液を用いた方が高価格に結びつきやすいという潜在的可能性までも否定しないにしても、北海道では優良精液と高価格形成の関連が比較的に弱いといえる。その要因として、育成の技術水準や繁殖

雌牛の能力問題、精液供給の制限、「育種評価」の困難性などを指摘できよう。さらにもう一つ、血統不明な種雄牛が、去勢で127頭、雌子牛で233頭と多く、それらが全体としての価格水準を押し下げているという問題も指摘できるかも知れない。血統不明の種雄牛が多く使われている背景に、優良精液の不足問題が横たわっていることは容易に想像されることである。

ところで、もう一つ、北海道の子牛市場が、道内での肥育産地が未発展なこともあって、道外家畜商や肥育会社の「寡占的」市場構造になっていることも、子牛価格形成の問題として挙げられることを指摘しておきたい。図7は、白老・十勝地区・美幌市場の相対的集中度を示したものであるが、上位10%の買参人が取引頭数の約半数を占めており、その大方が道外家畜商や肥育会社によって占められている。

表4に見られるように、上位5者の内4者が道外買参人で、それ以外の比較的大規模な買参人も

表5 黒毛和種上場頭数規模生産地の推移

(単位：頭)

産地	1994	1995	1996
足寄	1,280	1,281	947
白老	1,186	1,110	1,094
音更	1,118	973	633
豊頃	1,061	896	630
幕別	1,042	969	392
とうや湖	981	871	778
浦幌	953	827	424
美幌	725	625	92
平取	673	641	568
新冠	639	621	520
女満別	623	623	115
池田	619	592	377
鶴川	555	584	556
厚真	535	521	490
大樹	511	472	318
今金	540	526	441
穂別	415	412	386

資料：『北海道における肉用子牛の指定家畜市場取引成績』から作成した。

そのほとんどが道外者である。さらに道内買参人でも、道外産地からの要請により取引に参加するという者も多数みられるのである。彼らは買子と呼ばれ、優秀肥育産地と深い関係を持ち、それら産地から価格等取引諸条件の指示を受け売買に参加しているのである。こうして、北海道の子牛市場は取引頭数にしろ、価格にしろ、道外売参人や肥育産地の意向に強く規定されているのである。またここ4、5年の子牛価格の低迷は、北海道の子牛生産基盤に大きな影響を及ぼしてきている。表5は、黒毛和種上場頭数規模別産地の推移を示しているが、1,000頭以上の上場産地は1994年度の5産地から95年度には2産地、96年度には1産地へ減少し、また、95年度900頭超上場していた音更町・幕別町は96年度、それぞれ633頭、392頭に激減している。それ以外の産地も同様の推移を辿っており、とくに中心を担う500頭～1,000頭の産地は95年の13産地から7産地へと減少している。

地域的にみれば、これまで大きく拡大してきた網走管内の産地が次々に生産を縮小しており、北海道の和牛子牛生産は今、大きな転機に立たされているのである。

Ⅳ. まとめ

これまで検討してきたように、肉質重視の生産が強まる中で、後発子牛移出産地である北海道の子牛生産も、急速にそれに適合的な方向へ編成替えされてきた。しかし、優良精液が十分に確保できず、また、優秀な繁殖雌牛も充分確保できないなどの諸問題を孕みながらの、限界を持った展開だったのである。さらに、産地が全道各地に広範に展開し、しかも、それぞれの地域が独自に「精液」や繁殖雌牛の導入を行うなど「一つの産地」としてのまとまりに欠けている点や、繁殖・肥育一貫産地の形成が遅れてきた点も大きな問題として指摘できる。それは、血統の統一を困難にし、子牛の資質に大きなバラツキを生み、せっかく導入された「育種価評価」の活用を著しく困難にしているからである。また、子牛市場では道外家畜商などの優位性を不動のものにし、彼らにとっての有利な価格形成、したがって北海道の子牛生産農家にとっては不利な価格形成を余儀なくさせている。そして、それが肉牛、とくに子牛生産構造の不安定性をもたらし、縮小再生産への転回すらもたらしているのである。

さて、こうした状況から脱して、北海道における和牛・子牛生産の発展的展望を切り開くために、何が求められているのであろうか。その一つは、北海道全体として、目標とするレベル、すなわち高級和牛で行くのか、あるいは中級で行くのかといった目標を明確にすることである。その際、道内諸地域が激しい産地間競争を繰り広げることではなく“北海道一丸”、地域間協調体制を

築くことが重要であろう。二つは、その上に立って、繁殖・肥育の一貫産地を築くことである。まず生産者を主体とした肥育センターの設立を通じて子牛の買い支えとともに、肥育による産肉能力の発見とそれに基づく和牛改良の促進を進めるべきである。そのためには、行政・農協などの地域全体がその費用を負担しなければならない。それによって、肥育産地の情報が的確に北海道に伝えられないために活用されずにいる「育種価評価」を活用する道を開くことができる。それはまた、子牛市場における道外家畜商の支配をうち破り、価格形成をより有利なものにしていくことにもつながろう。三つは、生産者自身からやみくもに高価な優良精液の導入に走り、“一発勝負”的な生産に賭けるのではなく、時間をかけて和牛改良を進めるといふ姿勢を確立することである。そのためには、北海道や市町村の支援体制が重要なことは言うまでもない。

注1) 本論文で言う「和牛」とは黒毛和種のことである。

注2) [1] 宮田 P.11を引用すると、「1973年当時の兵庫と鳥取の雌子牛価格は14%の開差であったが、1976年には56.4%に開いた。」と指摘している。詳しいことはPP.10~11を参照すること。

注3) 血統と価格形成の乖離は単純に言及する自体が極めて困難であるが、現実的に種雄牛の能力がいくら優秀であっても、繁殖雌牛との関係や生産される子牛の特徴も一緒に考慮しなければならない。さらに外部経済環境や他産地との関連からみたこそ、血統と価格形成の問題は明らかになる。とくにここで言及した「血統」とは、兵庫の但馬牛で代表される資質系統の種雄牛利用からくる様々な問題を扱うために用いた限定された意味である。したがってここでは血統一般と価格形成の問題を扱っていないことを改めてお断りしておきたい。

注4) 全国和牛登録協会「これからの和牛の育種と改良」

1997年によると、通例「育種価」と呼んでいるのは「推定育種価」である。それは、ある雌牛の自分の子供が肥育され、その枝肉データと血統からの情報とを加味して計算された、すなわち、それらの情報に基づいて推定した能力の評価値である。また、その1頭の枝肉データをもつ肥育牛の母・父、そしてそれぞれの祖父母として血統のつながりのある個体が娘の子供、息子の子供の情報を血統関係を介して、推定された数値も「推定育種価」と呼ばれる。

注5) 和牛改良は一定の地域で明確な目標を設定し、地域及び生産者の協力がなければ、その成果はなかなか達成できない。目標を達成するために、登録事業が大きな意味を持つ。とくに優良形質の遺伝的な固定、優秀個体の計画生産など様々な事業を行うためには、一定の先進地域を中心に展開せざるを得ない。したがって育種組合の結成とそれに必要な育種登録を開始している。このように、育種組合を中心に展開している和牛改良は、1993年から育種牛制度に育種価が導入され、和牛改良は一層、計画的に進められるようになっていく。

注6) この30組合は育種組合である。

注7) 家畜改良事業団は、種雄牛の生産と肉用牛の産肉能力の向上を広域的に推進する目的で1980年、産肉能力平準化促進事業「平準化事業」を開始した。その後、優良和牛精液安定確保対策事業を加え、全国利用の可能な種雄牛を生産するとともに、その精液を供給している。

注8) 子牛価格は毎年変動するため、優良精液といえども一貫して高い子牛価格を実現しているわけではない。ここでは、最近高い子牛価格を実現し、一定の在庫を保有している精液という程度の意味で用いている。その代表格は高栄、北国7の8、金鶴、美津福、福栄などである。

引用・参考文献

- [1] 宮田育郎「但馬牛－日本における肉牛資源問題－」
『日本の農業』135号、1981年
- [2] 新山陽子「肉用牛産地形成と組織化」『日本の農業』154号、1985年
- [3] 森島賢編著『現代牛肉経済の諸問題』明文書房、1988年
- [4] 米内山昭和「北海道における和牛子牛市場編成と子牛価格形成に関する調査研究」滝川畜試研究報告第12号、1974年
- [5] 北海道畜産物価格安定基金協会、ホクレン農業協同組合連合会『北海道における肉用子牛指定家畜市場取引成績』、1972年～1995年
- [6] 柳京熙「北海道における和牛子牛生産と産地流通の変化」『農経論叢』第53集、1997年
- [7] 柳京熙「北海道における和牛改良と精液供給」『農経論叢』第54集、1998年

(1998年9月4日受理)